

# アルゼンチン・チリに渡った東洋磁器

長崎大学 野上 建紀

テンプロマヨール博物館 エラディオ・テロス・エスピノサ

## Oriental Porcelain Exported to Argentina and Chile

Takenori Nogami (Nagasaki University)

Eladio Terreros Espinosa (Templo Mayor Museum)

### Abstract

East Asian porcelains had been exported to West Asia via Indian Ocean. Especially from the later of 16<sup>th</sup> century to the early 17<sup>th</sup> century, Chinese porcelains were directly exported from Asia to Europe by Portuguese ships and Dutch ships. Indian Ocean route was main maritime route for trading ceramics. And they started to export Japanese porcelain from Nagasaki in the second half of 17<sup>th</sup> century, too. On the other hand, Spanish ships started to transport Chinese porcelains from Asia to the American continent in the late of 16<sup>th</sup> century. In 1571, Spain founded Manila City for the rule of the Philippines and the Asian trade. Ferdinand Magellan crossed the Pacific Ocean half a century before that time. After the city of Manila had been built, the Manila-Acapulco galleon trade route was soon established. It had functioned as a long-distance and large-scale sea trade route connecting the Asian world with the American continent until the early 19<sup>th</sup> century. Many Asian goods, such as porcelains, silks and spices, were exported to the America continent by the Spanish galleons. The authors have researched on Oriental porcelain excavated from Latin America since 2006. Most of them were Chinese and Japanese porcelain that were transported from Manila. We had already researched in Mexico, Guatemala, Cuba, Panama, Peru and Colombia. And in 2017, we went to South America and could analyze on Oriental porcelains found in Argentina and Chile. We will introduce Oriental porcelain, mainly Chinese porcelain, in Argentina and Chile and discuss on their characters and trade route.

**Key Words:** galleon trade, Chinese porcelain, Argentina, Chile

## 1. はじめに

17世紀以前、磁器は東アジアの特産であった。古代より東アジアの磁器はインド洋を渡り、西方へ運ばれ、大航海時代になるとアジアからヨーロッパへ直接、磁器が運ばれるよ

うになり、さらに新大陸にまで磁器が流通するようになった。特産であったがゆえにはるか離れた地域にまで流通していたのである。しかしながら、磁器貿易に関する考古学的な研究は、大航海時代以前の時代、すなわち文献記録に乏しい時代を対象とするものが中心であったため、そのフィールドも東アジアから西アジアにかけての海域が中心であった。近年、ヨーロッパにおける都市考古学や新大陸における植民地時代の考古学によって、アジア以外の地域でも出土した陶磁器が考古学的資料として扱われるようになってきたが、中世以前に比べるとまだそれらの研究成果は非常に少なく、十分な分析が行われていない。そのため、筆者らは2006年より新大陸、とりわけラテンアメリカのスペイン植民地における陶磁器の調査を開始した。もっともラテンアメリカの現地調査は2006年からであるが、ラテンアメリカに陶磁器を積み出したアジア側の貿易拠点であるマニラをはじめとしたアジアの港市の遺跡から出土した陶磁器の調査はすでに2004年に開始しており、ガレオン貿易とアジアの磁器の関わりについての研究はすでに15年間に及んでいる。

2006年から始めたラテンアメリカの現地調査のフィールドの中心は中米であった。アジアからの物資の最大の荷揚げ港であったアカプルコに近く、「ヌエバ・エスパーニャ」の首都であり、ラテンアメリカの政治経済の最大の中心都市であったメキシコシティでは、大量の東洋磁器が出土している。その他、中米では、メキシコのオアハカ、ベラクルス、プエブラ、ウエホティンゴなど（野上・エルナンデス2011、野上2013）、グアテマラのアンティグアなどで中国磁器とともに日本の肥前磁器も出土している（野上2014）。さらにカリブ海に浮かぶキューバのハバナでも中国磁器と肥前磁器が出土している（野上・テレロス2015）。パナマでは肥前磁器の出土は確認できなかったが、中国磁器は数多く確認することができた（野上・テレロスほか2015）。

一方、南米大陸については、これまで筆者らは2015年にペルー、2016年にコロンビアなど大陸北半部に位置する地域の陶磁器調査を実施している。ペルーではボデガ・イ・クアドラ遺跡やサンタ・カタリナ修道院遺跡、ルースウェルト遺跡などから中国磁器とともに肥前磁器も出土している（野上・テレロス2016）。コロンビアでは首都であるボゴタ、オカーニャ、カルタヘナの各都市の遺跡から中国磁器が出土している（野上・テレロス2017）。コロンビアでは肥前磁器の出土は確認できなかったが、トゥンハのサント・ドミンゴ教会のマリア像のチャペルには壁に装飾としてはめ込まれた肥前の染付花虫文芙蓉手皿を発見することができた。

筆者らはかつてのアジアの磁器の貿易ルートをたどるように研究を進めて、ようやく南

米大陸にたどり着いたところである。そして、東アジアから地理的に最も遠い地域が南米大陸の中緯度地方である (Fig. 1、Fig. 2)。現在の国名で言えば、アルゼンチン、ブラジル、チリ、ウルグアイ、パラグアイなどが該当する。生産地である東アジアから最も遠い市場へいつ頃からどのように磁器が運ばれたか、そして、どのように普及していったかを知るために、今回、アルゼンチンとチリの各都市の出土磁器の調査を行った。

日程は2017年7月26日～8月11日の17日間であり。調査地や調査遺跡は以下のとおりである。

ブエノスアイレスでは、サンフランシスコ教会、ブエノスアイレス博物館、フアン・アンブロセッティ民俗学博物館 (Museo Juan Ambrosetti)、サント・ドミンゴ教会、ブエノスアイレス大学、パサヘ・ベルグラノ博物館 (Pasaje Belgrano)、中華街、サルミエント歴史博物館 (Museo Historico Sarmiento)、国立装飾博物館 (Museo Nacional de Arte Decorativo)、イスマノアメリカ美術館 (Museo de Arte Hispanoamericano “Issac Fernández Blanco”)、大聖堂博物館 (Museo de la Catedral)、カビルド、カサ・ロサダ博物館 (Museo Casa Rosada) の調査を行った。

サンタ・フェでは、民族学博物館 (Museo Etnografico)、サン・フランシスコ教会博物館、サンタ・フェ・ラ・ビエハ考古公園 (Parque Arqueológico, Santa Fe la Vieja) の調査を行った。

メンドーサでは、サンフランシスコ修道院、郷土史博物館 (Museo del Area Fundacional) の調査を行った。

サンティアゴでは、サンティアゴ大聖堂 (Catedral de Santiago)、国立歴史博物館 (Museo Histórico Nacional)、Museo de la Merced、プレコロンビア芸術博物館 (Museo Chileno de Arte Precolombiano)、Museo de Arte Contemporáneo、サンティアゴ考古学博物館 (Museo Arqueologico de Santiago) の調査を行った。

## 2. アルゼンチン出土の東洋磁器

スペイン人の進出以前、アルゼンチン地域ではアンデス山麓の高地にほとんどの定住人口が集中し、低地の平原には少数の採集狩猟民が散在するのみであった (長野2007、p409)。植民地時代には、内陸部にはペルーおよびチリから移動したスペイン人によって都市が建設され、ポトシ銀山に食料品・衣料品を供給するための農牧業、手工業が栄え、アンデス

山脈を越えて太平洋岸のリマに連なる交易ルート沿いにはいくつもの町が生まれた（長野2007、p409）。しかし、1776年にブエノスアイレスがリオ・デ・ラ・プラタ（Rio de la Plata）副王領の首都とされると、それまで中央アメリカ経由だった物資の流れが、ブエノスアイレス港から直接宗主国スペインへ向かうようになったという（長野2007、p409）。ポトシ銀山衰退でマーケットを失った内陸部に代わり、ブエノスアイレスが経済中心地の地位を占めていくことになるという（長野2007、p409）。

### 2. 1. サンタ・フェ・ラ・ビエハ（Santa Fe la Vieja）

現在のサンタ・フェ州の州都であるサンタ・フェは、パラナ川とサラド川の合流地点近くに位置しているが、元々はカヤスタ（Cayasta）近郊に1573年11月15日にフアン・デ・ガライ（Juan de Garay）によって設立された町である（Fig. 6、11）。川の氾濫や洪水によってしばしば破壊され、1660年に現在の位置に移転し、旧地（サンタ・フェ・ラ・ビエハ）は放棄され、現在は遺跡公園として整備されている（Fig. 7～9）。そのため、サンタ・フェ・ラ・ビエハ遺跡から出土する東洋磁器は1660年以前のものがほとんどである。

遺物はサンタ・フェ・ラ・ビエハ遺跡公園内にある博物館（Fig. 10）と現在のサンタ・フェにある民族学博物館（Museo Etnografico）に展示されている（Fig. 3）。

サンタ・フェにはさまざまな産地の陶磁器が輸入されている。中米のパナマ産の陶器、ヨーロッパのスペイン、ポルトガル、イタリア、ドイツなどの陶器、そして、アジアの中国磁器などである。民族学博物館に展示・収蔵されている出土中国磁器は、33点あり（Fig. 5）、多くが青花皿の破片であり、他に青花碗の破片がある。いずれも明末の景德鎮の製品である。サンタ・フェ・ラ・ビエハ遺跡公園内にある博物館には46点の中国磁器片が展示されているが、いずれも小片であり、明末の景德鎮の製品である（Fig. 10、12）。やはり多くが青花皿の破片であり、他に青花碗、色絵碗の破片が見られる。青花碗にはチョコレートカップが含まれている。

### 2. 2. メンドーサ（Mendoza）

メンドーサは、アルゼンチンとチリの国境付近の標高746mに位置し、ワインの産地として知られる町である。メンドーサ州の州都であり、南米大陸最高峰のアコンカグア（6960m）への入口の町でもある。

メンドーサは、1561年3月2日にペドロ・デル・カステージョによって創建された古

い町である。1600年以前は、住んでいたスペイン人は80名にも満たないと推定されているが、徐々に繁栄していった。しかしながら、創建から三百年後の1861年3月20日の大地震によって壊滅的な被害を受けており、町中にはコロニアル様式の建築物は少ない。

かつての市庁舎 (Cabildo) は町の中心である独立広場 (Plaza Independencia) から北東に約2 km 離れた位置にあった。市庁舎は大地震によって崩壊し、その跡地に郷土史博物館 (Museo del Area Fundacional) が建てられている (Fig. 13)。館内では市庁舎の遺構も見ることができる (Fig. 14)。そして、その博物館の近くには、サンフランシスコ・イエズス会 (Jesuiticas de San Francisco) の遺構が保存展示されている (Fig. 15)。Jesuiticas de San Francisco は、1716年から1731年の間にイエズス会によって建設され、1767年にイエズス会が追放されてからは、フランシスコ会の組織下となったが、やはり1861年の大地震によって破壊された。

今回は、Jesuiticas de San Francisco の調査センターでメンドーサ出土陶磁器の調査を行い、18世紀頃の色絵碗及び皿 (Chacabuco441出土)、16世紀末～17世紀前半の景德鎮の青花皿・壺等の小片 (San Francisco 出土)、16～17世紀の景德鎮の青花碗等 (EPH 出土) などの中国磁器の他、近代の日本製の色絵婦人図ソーサー (Cabildo 出土) を確認した (Fig. 17)。

### 2.3. ブエノスアイレス (Buenos Aires)

ブエノスアイレスは、アルゼンチンの首都であり、ラ・プラタ川の河口に広がる港町である。ヨーロッパからの移民によって築かれた町であり、「南米のパリ」とも呼ばれる。中南米の他の国の首都と比べて、政治的な中心となる時期が遅く、町並みもコロニアル調というよりヨーロッパ調である。

ブエノスアイレスは、1536年、ペドロ・デ・メンドサ探検隊長によって建設された。当初は都市というより要塞的な施設であり、一時は要塞としても放棄されている。そして、1580年にファン・デ・ガライ率いる探検隊によって、正式に再建設・創設されたとされる。60世帯あまりが入植し、官庁舎 (カビルド) の所在地、教会、病院等、土地配分などが政令によって決められ、都市としてのスタートを見るが、有力な商人や軍人は港を事実上、占拠し、密貿易に励んだという (松本2005)。当時、ブエノスアイレスはペルー副王領に属しており、ヨーロッパへの輸出品などはペルーのリマを経由するように強制されていたため、密貿易が盛んになったとされる。そして、前述したように1776年にはリオ・デ・ラ・

プラタ副王領が設立され、その首都となり、政治的にも経済的にも副王領の中心として発展することとなる。因みにブエノスアイレスの再建設の100年後にあたる1680年には5,108人だった人口が、リオ・デ・ラ・プラタ副王領が設立された頃の1778年には24,205人になっていた（松本2005）。

### 2.3.1. ブエノスアイレス大学 (Ciudad Universitaria de Buenos Aires)

ブエノスアイレス大学には、ブエノスアイレス市内の San Lorenzo から出土した19世紀の青花楼閣山水文壺 (SL-019) (Fig. 18)、近代の日本製と推定される銅版転写による染付梅文皿 (「日本」銘) が所蔵されており (Fig. 20)、Daniel Schávelzon の教示によれば、Casa Ezcurra (455 Alsina St.) から18世紀後半の青花龍文碗 (Fig. 19)、Defensa 751 から青花龍文碗・楼閣山水文皿が出土している (Fig. 21)。青花龍文碗の類品は1770年にアルゼンチンのパタゴニア海岸の Port Desire 地先で沈んだ沈没船 (Swift Sloop) の資料の中に見られる (Fig. 23)。

### 2.3.2. パサヘ・ベルグラノー博物館 (Pasaje Belgrano)

パサヘ・ベルグラノー博物館はブエノスアイレスの大聖堂の約500m南に位置する遺跡博物館である (Fig. 24)。ガライによる土地配分の区分では、Piloto Mayor の領域となっており、その後、18世紀中頃の1756年にはオビスポの家の庭園 (Jardín de la Casa del Obispo) として地図に描かれている。その後は18世紀末の1790年に最初の建物であるプエブラ・アルマンドスの家 (Casa Puebla-Almandoz) が建設されたようである。そして、19世紀末の1891年にはパサヘ・ベルグラノーの建物が建設されている。2005年に Daniel Schávelzon によって最初の発掘調査が行われ、以後、2008年には同氏による再調査、2009年には Flavia Zorzi によって発掘が行われ、17世紀から19世紀にかけての遺構と遺物が多数発見されている。そして、2011年にかけて修復工事が行われ、博物館として整備されている。今回はこの発掘調査による出土遺物を含めて、ブエノスアイレスから出土した陶磁器を調査した。東洋磁器の青花を写したマヨリカ陶器 (Fig. 25、26) や伊万里写しのヨーロッパ産色絵磁器 (Fig. 28-10) をはじめとしたヨーロッパ産の陶磁器が多数確認されるが、中国磁器も数点確認された (Fig. 28-1~3)。16世紀末~17世紀前半の景德鎮の青花皿、17世紀後半~18世紀前半の青花皿などである。

### 2.3.3. 国立装飾博物館 (Museo Nacional de Arte Decorativo) (Fig. 29)

18～19世紀の色絵壺 (Fig. 29-2)、18世紀の褐釉白抜色絵セット (食器、コーヒーカップ、チョコレートカップ) (Fig. 29-3,4)、明治期の日本磁器 (有田、薩摩、九谷ほか) が展示されていた (Fig. 29-5～9)。

## 3. チリ出土の東洋磁器

チリは東側のアンデス山脈を背に、西側に太平洋に面した国であり、南北4000km以上にわたって細長く延びている国土を有している。北にペルー、北東にボリビア、東にアルゼンチンと国境を接している。

1540年、スペイン人の征服者フランシスコ・ピサロの配下であったペドロ・デ・バルディビアの遠征隊がペルーから侵入し、1541年にサンティアゴを創設した。続いてサンティアゴを中心としたチリの中心地域にアウディエンシアが創立されたのは、1565年と1609年である (増田編2000、p69)。チリ総督領は当初よりペルー副王領に組み込まれ、1776年にリオ・デ・ラ・プラタ副王領が分離した後もペルー副王領に組み込まれたままであった。

今回の調査では、チリの首都であるサンティアゴ (Fig. 30、31) から出土した陶磁器を調査し、中国磁器片を9点確認した (Fig. 33)。多くが青花皿である。16世紀末～17世紀前半の景德鎮の青花皿と青花碗、16世紀末～17世紀前半の福建省漳州窯系の青花皿 (Fig. 33-9) および色絵皿 (Fig. 33-1) などがある。

## 4. アルゼンチン・チリへの東洋磁器の流通について

### 4.1 年代と器種等について

小片が多く、器種が不明なものが多いが、皿が大半を占めることは確かである。他に碗、瓶 (壺) などがある。碗の中でも中南米で比較的良好に見られるチョコレートカップが、サンタ・フェ・ラ・ビエハで見られる。種類は、青花が大半であり、色絵は少量である。青磁は確認されていない。

年代は、16世紀末～17世紀前半のものが最も多く、17世紀後半以降のものは少ない。1660年に移転したサンタ・フェ・ラ・ビエハの資料は移転以前の資料がほとんどを占める。

生産地についてみると、16世紀末～17世紀前半の東洋磁器のほとんどが景德鎮産で

ある。一部、漳州窯系の製品が見られる。今回の調査では近世の肥前磁器は確認できなかった。2006年以降、筆者らは中南米から出土した陶磁器を分類し、産地同定を行っているが、その大半は中国磁器である（野上2016）。そして、これまでの筆者らの調査で中国磁器の流通量が多い地域ほど肥前磁器の出土が発見される頻度が高いことが確認されている。特に17世紀後半においては、市場で中国磁器と肥前磁器が競合していたわけでも棲み分けていたわけでもない。つまり、中国磁器の欠乏が生んだ市場の空白にその代替品として輸出されているため、中国磁器の需要が大きい地域ほど肥前磁器が輸入されることになる。今回の調査で最も多くの中国磁器が発見されているのはサンタ・フェ・ラ・ビエハであり、小片ながら79点の破片が見られる。しかしながら、肥前磁器が海外輸出を開始して間もない1660年に移転しているため、肥前磁器がサンタ・フェ・ラ・ビエハに持ち込まれたとしても非常に限られていると思われる。むしろ移転先である現在のサンタ・フェの方に持ち込まれた可能性が高い。

#### 4.2. 流通経路について

1571年にマニラが建設されて間もなくアジアとアメリカを結ぶガレオン貿易ルートが開設した（Fig. 1）。アメリカ大陸の銀が大量にアジアに運ばれ、多くのアジアの産物がマニラから太平洋を越えてアカプルコに運ばれた。メキシコで発見される東洋磁器は、この太平洋ルートで持ち込まれたものが大半であろうと考えられる。首都であるメキシコシティへはアカプルコから陸路で運ばれた。標高差2300mの運搬である。また、同じ中米のグアテマラも同様に太平洋経由であろうと思われるが、アカプルコから太平洋沿岸を南下した船でグアテマラの太平洋側の港に運ばれて、そこから陸路でもたらされたか、あるいはメキシコシティなどから陸路で運ばれたか、いずれかであろう。キューバなどカリブ海については、太平洋ルートでアカプルコに運ばれたものがメキシコシティを経て、大西洋側の港であるベラクルスに運ばれ、その港を起点として流通したものと推定される。特にハバナはベラクルスからスペイン本国等に向かう船の寄港地であるため、多くの東洋磁器が持ち込まれている（野上・テロス2015）。

一方、南米で発見される東洋磁器についてはまだ不明な点がある。太平洋に面したペルーについては、アカプルコからさらに太平洋沿岸を南下してもたらされたか、マニラから直接カヤオに運ばれた可能性、ベラクルスからハバナなどカリブ海に運ばれたものがパナマ経由でカヤオに運ばれた可能性、そして、ブエノスアイレスからコルドバを経由して、ポ



トシ経由で運ばれた可能性を考えた(野上・テレーロス2016)。いずれもポトシ銀山の銀がアジアやヨーロッパへ輸出されるルートあるいはポトシ銀山などに生活物資が持ち込まれるルートである。そして、コロンビアは、太平洋と大西洋の両方の大洋に面した国であり、内陸部についてはいずれかの港から運ばれたものと考えられる(野上・テレーロス2017)。太平洋側からであれば、コロンビアのブエナVENTOURAやエクアドルのグアヤキルなどに荷揚げされ、陸路でポパヤン、ボゴタ、トゥンハ、オカーニャへ運ばれる。リマへの流通ルートで挙げた一つ目のルートの分流およびその延長であろう。大西洋側であれば、カルタヘナなどに荷揚げされ、陸路で各都市に運ばれたと考えられる。カルタヘナへはバラクルスからハバナなどを経てもたらされたのであろう。

それでは、アルゼンチンとチリなど南米大陸の中緯度地方はどうか。まず南米大陸では、アンデス山脈が障壁のように南北に連なり、東と西の世界を隔てている。そのため、同じ中緯度地方と言ってもアルゼンチンとチリでは大きく異なることが想定される。チリで出土している東洋磁器については、太平洋を渡って運ばれた磁器が南下してもたらされたものと推定される。チリはペルー副王領に属しており、マニラから直接、運ばれたとは考えにくい。ペルーなどへ運ばれたものがさらに南へ運ばれ、もたらされたと推定される。サンティアゴはアンデス山脈とチリ海岸山脈に囲まれた盆地に位置しているため、荷揚げ港はバルパライソである。

一方、アルゼンチンで出土している東洋磁器については、いろいろなルートが考えられる(Fig. 2)。まずブエノスアイレスやサンタ・フェ・ラ・ビエハなどアルゼンチンの東部地区は、主に3通りのルートが考えられる。一つはチリから南米大陸の南側を回り込んで、ブエノスアイレスなどに運ばれるルート、一つはペルーからボリビアを経て、運ばれるルート、もう一つは大西洋側から運ばれるルートである。前二者は、太平洋ルートによるものである。後者は大西洋ルートによるものであるが、ポルトガル領に近いので、他の地域のようにスペイン人によるものではなく、ポルトガルによって南米に持ち込まれたものを入手した可能性もある。いずれのルートでもたらされたものか正確にはわからないが、サンタ・フェ・ラ・ビエハでは他の中南米で出土が見られるチョコレートカップが出土している(Fig. 12-3, 4)。ガレオン貿易とチョコレートカップとの関わりを考えると、サンタ・フェ・ラ・ビエハの遺物に関しては太平洋ルートによって運ばれた可能性が高いように思う。一方、1776年にリオ・デ・ラ・プラタ副王領が設立し、ブエノスアイレスが首都となり、それまで中米経由だった物資の流れが、ブエノスアイレス港から直接宗主国スベ

インへ向かうようになってからは、後者の大西洋ルートが主となる可能性も考えられる。ただし、当時はすでにヨーロッパ磁器が工業製品として輸出されるようになっていたので、このルートによって中国磁器が輸入されたものは前代に比べて少なかったであろうと推定される。そして、チリとの国境に近いアンデス山脈の麓に位置するメンドーサの場合、サンティアゴからアンデス山脈を越えてもたらされた可能性も考えられる。

## 5. おわりに

1571年にマニラが建設され、ガレオン貿易ルートが開設されると、16世紀末には東アジアからみて最も遠い市場にまで磁器がもたらされている。しかし、最も遠いがゆえにその流通ルートはわからない点が多い。いわゆる地球の反対側であるため、東回りで運んでも西回りで運んでも距離的に変わらないからである。距離的に変わらないにしても太平洋側のチリの場合は、太平洋を越えてペルーに運ばれた磁器がさらに南下して運ばれたと考えるのが最も合理的なものと推定されるが、大西洋側のアルゼンチンの場合、大西洋経由であった可能性も考えなくてはならないだろう。少なくとも18世紀後半以降はそうであろうと考える。

最後に今後の課題をあげておく。今回の調査はとても限られたものであり、アルゼンチンとチリにおける東洋磁器の出土状況の概要の把握にも至っていない。よって、より網羅的な調査が必要であろう。特に「銀の道」上に位置する諸都市、チリのサンティアゴの外港であるバルパライソなどの調査が重要である。サンタ・フェ・ラ・ビエハでは17世紀中頃以前の中国磁器が一定量発見されているため、移転先の現在のサンタ・フェにおいても東洋磁器が継続的に流入された可能性が高い。移転の時期が肥前磁器の大量輸出時代の開始時期と重なっているため、その中には今回、確認することができなかった肥前磁器も見られるかもしれない。また、太平洋側のチリと大西洋側のアルゼンチンの比較も重要である。流通ルートを考える上での示唆を与えてくれると思う。

最後に本研究にあたっては、多くの方々のご協力を得た。芳名を記して謝意としたい。

Daniel Schávelzon、Patricia Frazzi、Lic.Flavia Zorzi、Lic.Gabriel Cocco、Juanita Baeza & Celeste Alvarez、Camila Antil、Francesca Samora

## 引用文献

- 長野太郎2007「『移民国家』, アルゼンチン—その文化的アイデンティティ—」『ラテンアメリカ』朝倉世界地理講座14 朝倉書店 pp. 408-416
- 野上建紀2013「ガレオン貿易と肥前磁器—二つの大洋を横断した日本のやきもの—」『東洋陶磁』第42号 p141-176
- 野上建紀2014「アンティグア・グアテマラ出土の東洋磁器」『金沢大学考古学紀要』第35号 p73-85
- 野上建紀2016「ガレオン貿易と中国磁器—新大陸に向かう東回りの陶磁の道—」『東洋陶磁』第45号 p59-79
- 野上建紀2017『アジア・太平洋海域における有田焼交易ネットワークの考古学的研究』西岡総合印刷株式会社
- 野上建紀・フデイスエルナンデスアランダ2011「ベラクルス出土の肥前磁器」『金沢大学考古学紀要』第32号 p47-50
- 野上建紀・エラディオテレロスエスピノサ2015「ハバナ出土の東洋磁器」『多文化社会研究』vol. 1p141-157
- 野上建紀・エラディオテレーロス・ミルタリネロバロニ・クレメンテマリノ2015「パナマ・ビエホ出土の東洋磁器」『近世鎖国期における先駆的輸出工業製品の考古学的研究』p30-34
- 野上建紀・エラディオテレーロス2016「ペルーに渡った日本磁器」『横浜ユーラシア文化館紀要』No. 4 p1-17
- 野上建紀・エラディオテレロスエスピノサ2017「コロンビアに渡った東洋磁器」『多文化社会研究』vol. 3165-177
- 増田義郎編2000『ラテンアメリカ史Ⅱ 南アメリカ』新版世界各国史26 山川出版社
- アルベルト松本2005『アルゼンチンを知るための54章』明石書店
- Daniel Schávelzon. Catalogo de Ceramias Historicas de Buenos Aires (Siglos XVI-XX) con notas sobre la región del Río de la Plata.

本研究は、JSPS 科研費 JP17H02375の助成を受けたものです。

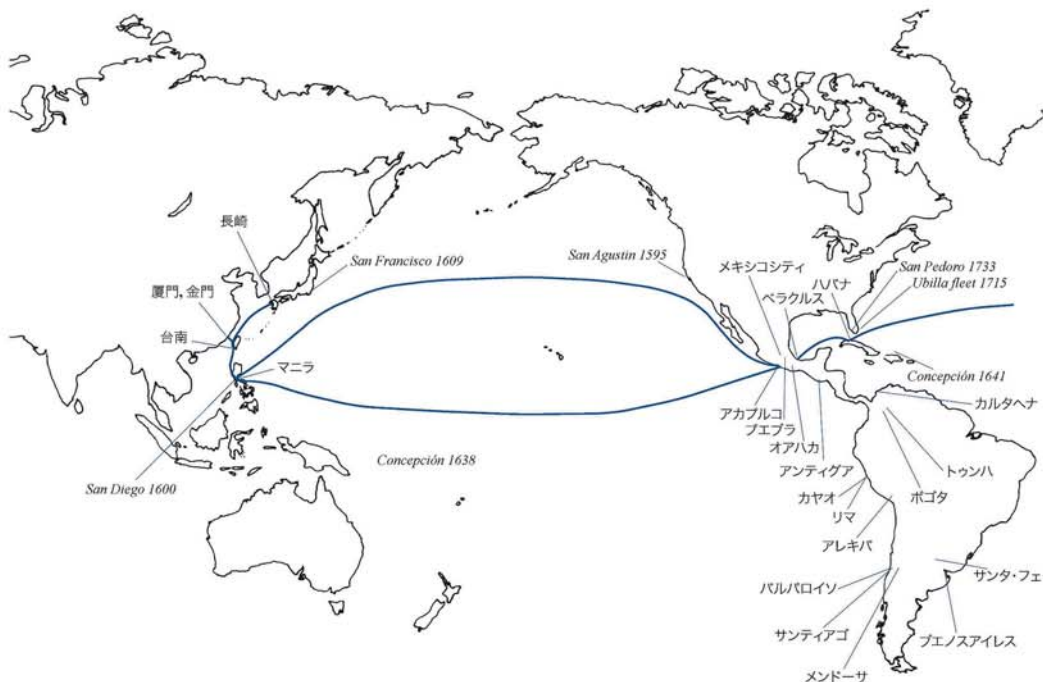


Fig.1 ガレオン貿易関連地図



Fig.2 南アメリカ大陸地図



Fig.3 民族学博物館 (Museo Etnográfico)



Fig.4 Lic. Gabriel Cocco (左)

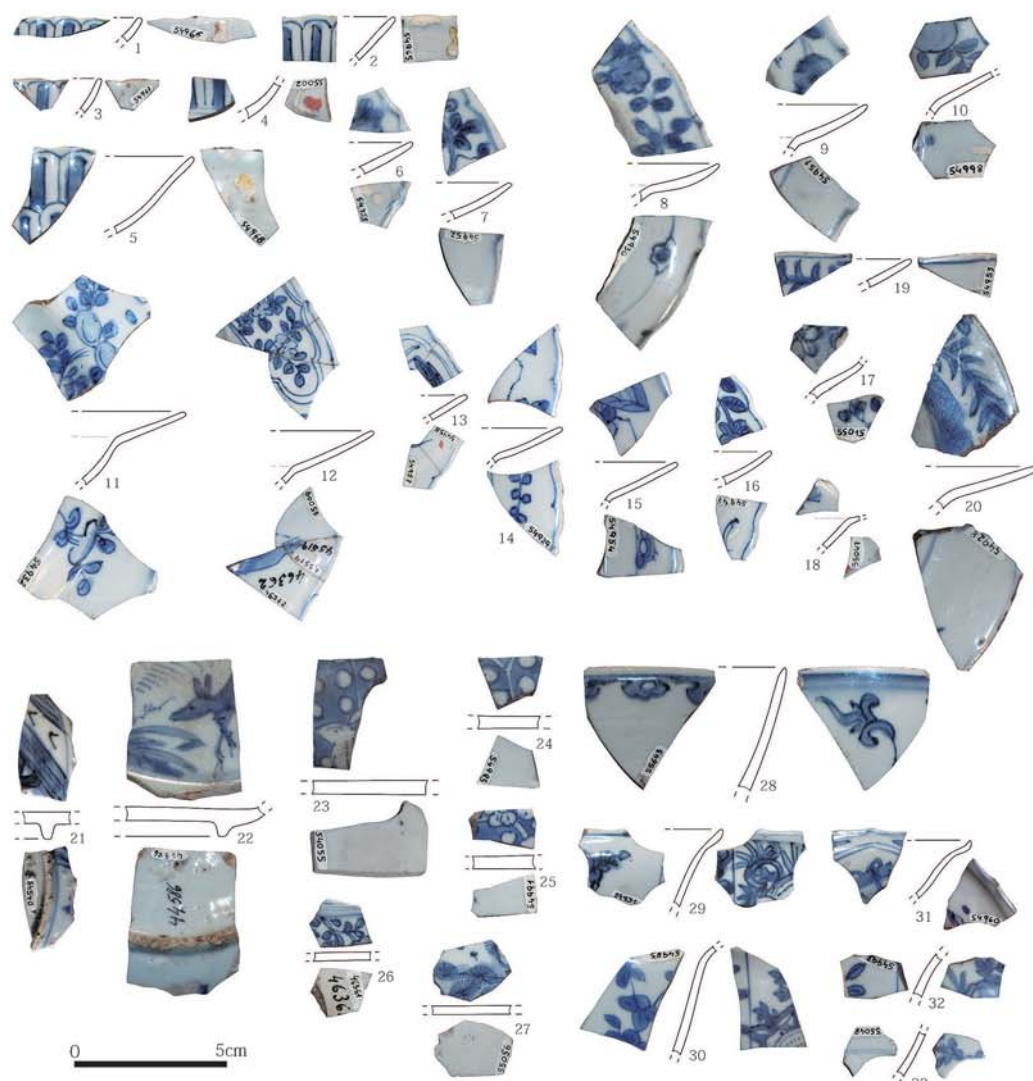


Fig.5 サンタ・フェ・ラ・ピエ八出土中国磁器



Fig.6 サンタ・フェ周辺地図



Fig.7 サン・ハビエル川 (Río San Javier)



Fig.8 サンタ・フェ・ラ・ビエハ遺跡



Fig.9 サン・フランシスコ教会・修道院遺跡



Fig.10 サンタ・フェ・ラ・ビエハ出土中国磁器



Fig.11 サンタ・フェ・ラ・ビエハ模型

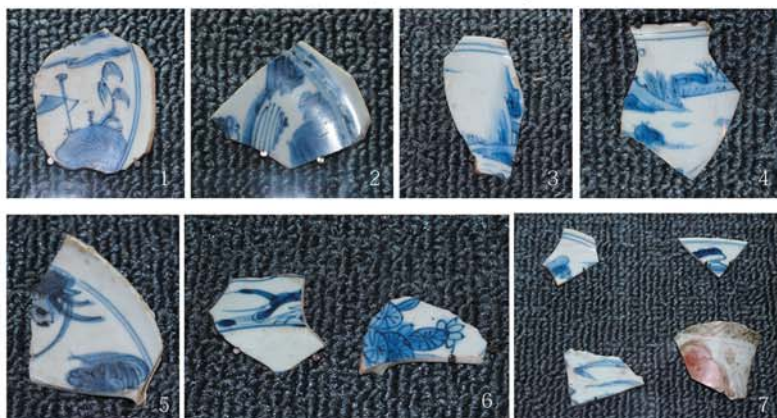


Fig.12 サンタ・フェ・ラ・ビエハ出土中国磁器



Fig.13 郷土史博物館 (Museo del Area Fundacional)



Fig.14 郷土史博物館内の市庁舎遺構



Fig.15 フランシスコ・イエズス会遺跡



Fig.16 フランシスコ・イエズス会遺跡調査研究スタッフ

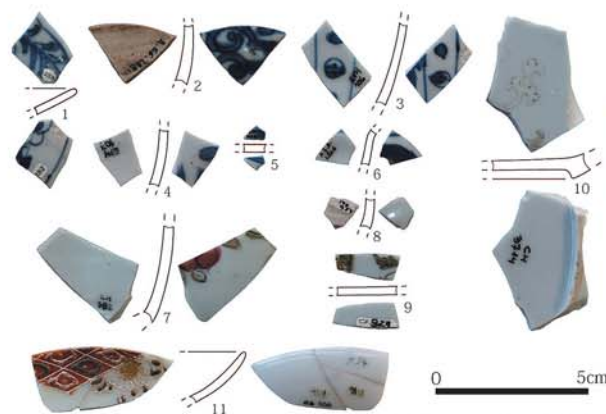


Fig.17 メンドーサ出土東洋磁器



Fig.18 San Lorenzo 出土青花楼阁山水文壺



Fig.19 Casa Ezcurra 出土青花龍文碗



Fig.20 銅版転写染付皿 (「日本」銘)



Fig.21 Defensa751 出土中国磁器



Fig.22 Daniel Schávelzon (左), Patricia Frazzi (右)



Fig.23 Swift Sloop 出土青花龍文碗





Fig.24 パサヘ・ベルグラノー博物館



Fig.25 パサヘ・ベルグラノー遺跡出土マヨリカ陶器



Fig.26 パサヘ・ベルグラノー遺跡出土マヨリカ陶器



Fig.27 Lic.Flavia Zorzi 女史 (中央)

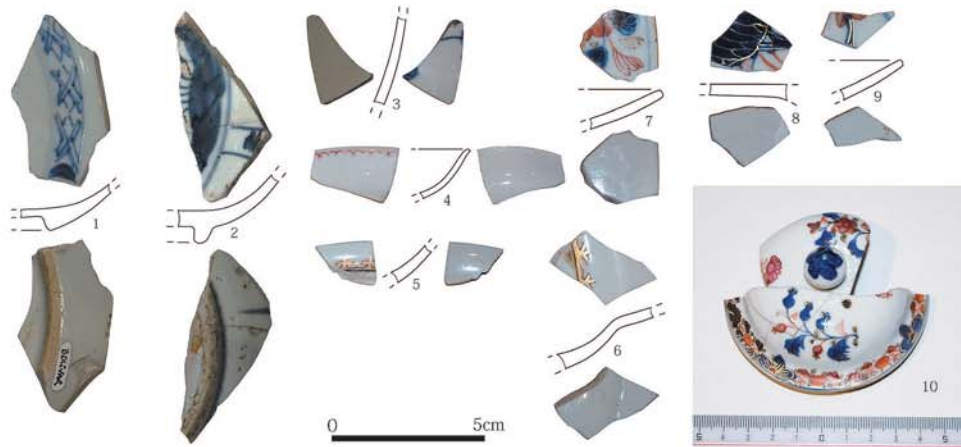


Fig.28 ブエノスアイレス出土磁器 (中国磁器、倣東洋磁器)



1 国立装飾博物館外観



2 色絵花鳥文壺 (中国)



3 褐釉白抜色絵セット (一部) (中国)



4 褐釉白抜色絵セット (一部) (中国)



5 色絵風俗図皿 (肥前産)



6 色絵武者婦人図皿 (肥前産)



7 色絵菊唐草文瓶 (肥前産)



8 色絵七福神図蓋付三足壺 (日本産)



9 色絵瓶・杯 (九谷産)

Fig.29 国立装飾博物館および展示品

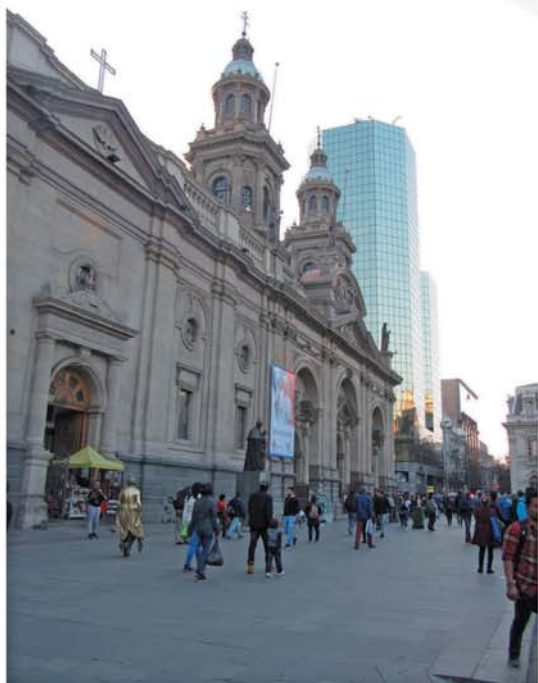


Fig.30 サンティアゴ大聖堂 (Catedral de Santiago)



Fig.31 サンティアゴ博物館 (Museo de Santiago)



Fig.32 Juanita Baeza 女史 (右)

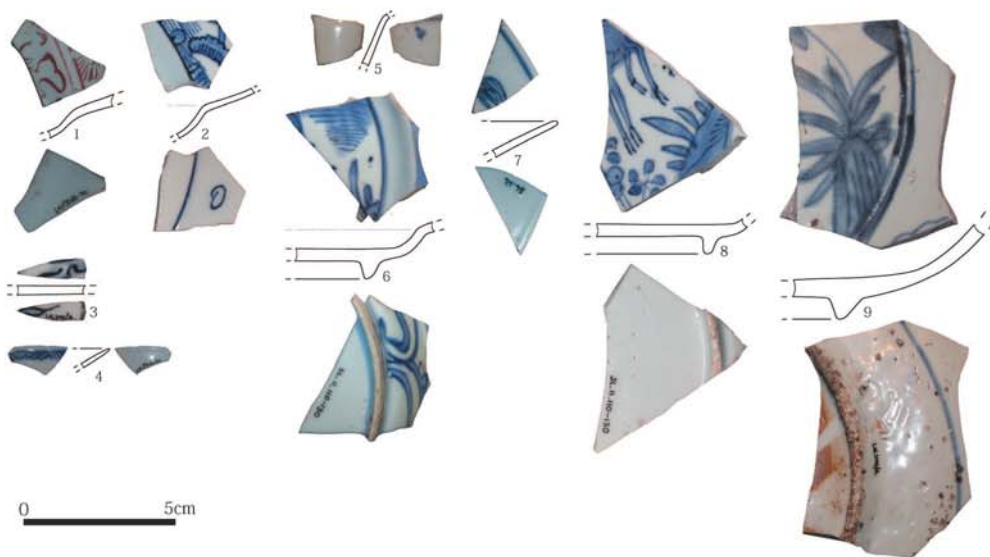


Fig.33 サン・ティアゴ出土中国磁器